

ライプニッツにおける「進歩」について

技術・学問・幸福の関係を手がかりに

今野諒子(日本学術振興会特別研究員 PD・東京大学)

ライプニッツの形而上学で、「機械」の概念における区別がよく知られている。彼によれば、「自然の機械」すなわち、神の知恵が創造した「諸々の機械的仕組み *mechanismes*」と、有限な精神が造った機械との差異は、程度の上でのものではなく、類におけるそれであるという。

「[...]自然の機械は真に無数の器官を有し、あらゆる偶有事にも万全の体制をとり得るので破壊されない、ということを知らなければならない。自然の機械はその最も小さな部分に至るまでやはり機械となっている。そればかりではない。自然の機械は常にこれまでの機械と同じ機械たり続ける。」

(『実体の本性と実体相互の交渉ならびに心身の結合についての新たな説』§10、ゲルハルト版哲学著作集 IV 482;ライプニッツ著作集 I-8, 82)

自然と人工の機械は、無限性・不壊性・再生産性において異なる。このように、ライプニッツは一見、両者の差異を強調し、特に「自然の機械」の優位を説いているかのように思われる。

しかし、ライプニッツは、人工の機械、そしてそれを下支えする「技術」の有用性を看過していたわけではない。むしろ、それを我々人間の知識の拡張や、社会における実践へと役立てることを企図していた。特に興味深いのは、ライプニッツが、各国のアカデミーに相当する「諸学と諸技芸の協会」の設立構想の文脈で、こうした着想を得ていたことである。その上、「協会」の構想は、初期のマインツ期にまで遡る。実際の設立が、ライプニッツ後期の 1700 年であったことに鑑みれば、技術を理論と実践の両方において役立てることは、ライプニッツの生涯を貫いて見られる原則の一つなのである。彼によれば、「神の名誉」のために、社会の公共の事柄に携わる者とは、

「[...]人類を幸福にすることにも、自然と技術の発見／発明された奇蹟を、自分たちになし得る限り適用しようと、そして神が世界に為したことを自分たちの領域において模倣しようと、汗を流す人々のことである。」

(『諸々の技芸と学の興隆のための協会をドイツに設立する提案の概要 1-1』§22、アカデミー版著作集 IV 1, 536;ライプニッツ著作集 II-3, 320 強調は著者)

自然の探究に加えて、人類の幸福のために、技術を実際に用いることこそが、有限者としての人間に与えられた、神を模倣するための手段なのである。このため、ライプニッツは、有益な発見や実験を無益に失うことのないように、技術者のための学校を設立することを提言している。

ライプニッツにとっての技術とは、第一に、発見や発明、そして「増加ではなく進歩する」実験結果の獲得に寄与する。この意味で、技術は、知識を拡張し、学問を進歩させるために不可欠である。第二に、諸学問が秩序立てて打ち立てられた暁には、技術はさらに、社会の公共事業や、人々の生活の向上に役立てられる。例えば、鉱山開発や蒸気機関の改良などである。ラ

イプニッツが、「協会」の構想・設立において目指していたのは、純粹に理論上での進歩を志す人々の集団、またはトーマス・クーンのいう「科学者の専門家集団」を組織することには止まらない。実践の領域で「人類の幸福」を志向する集団として起草していた。ライプニッツの目的は、「理論と実践を統一すること」にあったのである。

では、ライプニッツにとって、学問そのものの進歩は、どのように位置付けられるのだろうか。諸技術の改良に負うのか、それとも「人類の幸福」に照らして判断されるのか。または、これらとは異なる仕方と考えられるのか。本発表では、主に、「理論と実践」の両者にまたがる「技術」の概念に着目し、考察を行いたい。